

平成31年度末「学校評価実施報告」

1. 「確かな学力」の育成に向けて

(1) 重点目標

教科会を中心とした授業研修の活性化を行う中で、自ら学ぶ・学べる学習環境作りを推進する。

(2) 具体的な取組

- 全教科が「学ぶ意義」「将来性」「身につけたい資質・能力」「魅力」に着目したプレゼンを、全校集会形式（梅津の学び オリエンテーション）で実施する。
- 教科会の時間を授業時間内に設定し、教科内で教員一人ひとりが授業案を作成し、年間1回は研究授業か公開授業を計画・実施する。
- 「本時の目標」と「本時のふりかえり」を毎授業確認、記述する。
- 確認プログラムが実施されるごとに、授業担当者が自クラスの成果と課題を詳しく分析する。
- 定着が困難な生徒に対する個別の支援体制を考え、学年ごとに発案、実践する。
- 土日の学習時間確保と一週間の学びの定着を目的とし、生徒一人ひとりに自学自習ノートを持たせて、金曜日配布、月曜日回収の取組実施。
- 保護者、家庭に対して学習習慣定着・確立の啓発を目的とした冊子「自学自習を楽しもう」を配布。

(3) 年間総括（成果と課題）

長年の生徒指導面の取り組みにより問題行動等が減り、落ち着いて授業が行える状態となってきた。さらに保護者の方々の教育への関心の高まりもあり、課題は大きいものの家庭学習習慣にも変化が見られる。その成果が学力にいい影響を与えてきたことが、上段の指標結果からわかる。

とくに1・2年生は、それぞれ小学校時代の学習確認プログラムの5教科総合の指数で、自身最高点数をあげた。3年生も自身過去最高指標タイで終わることができた。また学校評価アンケートでは、生徒からの授業についての評価が大きく上昇し、よくわかるだけでなく、今求められているような活発な授業が行われていると言える。

(4) 分析を踏まえた取組の改善

学習確認プログラムですべての学力が計れるものではないが、唯一の指標として大切に扱いたい。本校は長く京都市平均以下が続いているが、今年度最後の1年Basic2と2年Pre-3の結果は、教職員・生徒の自信につながり、さらに「やればできる」という学習への意欲となる。来年度早々の、ここ5年間続けている『学習の意義』についての全校集会において、教員が更に高いプレゼン力を發揮し、今年度の結果も交えて、全生徒の学習意欲の喚起を目指したい。

また、これまで学習確認プログラムの予習シートや復習シートは、各教科担当に扱いを任せていたが、全教科で最も効果の高い扱い方に統一し、教科の横つながりも発揮させたい。

『伝える力』については、まず文章や図・グラフ等の資料を読む力の育成から必要で、朝読書はもちろん、図書館を使った授業を積極的に全教科で取り組みたい。

(5) 学校運営協議会による意見・支援策

（新型コロナウィルス感染症拡大防止のため開催できず）

2. 「豊かな心」の育成に向けて

(1) 重点目標

自分も周りの仲間も大切にできる心と態度、また多様な人々を認め補い合える豊かな人間性の育成。

(2) 具体的な取組

- ① 道徳教育を充実させ、共によりよく生きるために、お互いの生き方や価値観の違いを認め合い、その良さを伸ばしつつ、多様性を理解する姿勢を身につけさせる。
- ② 3年間を見通した本校の人権教育のスタイルを継続しつつ、学年の実態や今日的な課題に適した内容を取り入れ、充実を図る。また、あらゆる取組で「人権」を意識し、規範意識の育成も図る。
- ③ いじめや暴力などの問題行動に対しては、毅然とした姿勢で指導を徹底する。とくにいじめは重大な人権問題であることを認識し、未然防止・早期発見のための学校体制を継続する。
- ④ 今年度本校生徒に身に付けさせたい『伝える力』の基礎となる言語能力を高めるため、「朝読書」を、小中一貫の一つの柱としても継続し実践していく。また朝読書の時間を使い、新聞記事を読ませ、疑問点や意見等を文章にして伝える取組を行う。
- ⑤ トーキング梅津（感動体験作文発表会；年間3回）を総合の時間に移管し、自分の意見や考えをまとめ、文書にして仲間に伝えさせる。さらに、生徒同士で意見を交流させることにより、生徒の心をより深く耕し、学級・学年・学校全体を支え高め合える集団に広げる。

(3) 年間総括（成果と課題）

いじめについては、記名式アンケートで出てきた件は、すべて対応済みのものばかりで、十分日頃から生徒の観察を行い、細かな情報も共有し、素早い対応も出来ていることがわかった。学校評価アンケートでは、昨年同期比で若干の上下があったものの、依然高い評価を頂いていると言える。しかしこれに満足すると現状の維持も難しくなると、教職員で共通して自覚したい。高い評価からさらに一步二歩進めるには、相当の新しい発想の取り組みが必要。

(4) 分析を踏まえた取組の改善

本校生徒が先輩から引き継いでいる言葉・約束・仲間を大切にする『梅津の志』のリニューアル、またはバージョンアップを検討する時期かと思われる。大切にした上で、どのような生徒（人）を目指すのか、生徒たち自らが考える場を、生徒総会などでもってもいいのではないか。社会で自分たちがどのように活躍するか、のために何を身につけて、何ができるようにならなくてはいけないのか、生徒たちに考えさせた

(5) 学校運営協議会による意見・支援策

（新型コロナウィルス感染症拡大防止のため開催できず）

3. 「健やかな体」の育成に向けて

(1) 重点目標

健康・安全などについての関心を高め、心身の健康の保持促進に対する実践力を養い、また部活動などのスポーツを通して、体力の向上・情緒面の安定、また、知的な発達を促す

(2) 具体的な取組

- ① 年度当初の各種診断結果を重視し、担任・生徒本人・保護者との共有を図り、積極的な受診を促す。
- ② 保健教育の充実を図り、基本的生活習慣確立に向けた指導と支援を行う。
- ③ 食教育係の「食育だより」を活用して食育を推進し、心と体の調和の取れた成長をはかる。さらに、朝食の喫食率の向上を目指し、朝食の必要性の家庭への周知・徹底を図る。
- ④ 朝の健康チェックにより、日常の健康観察の徹底と、迅速な対応を図る。また、必要に応じて、学校医や専門

機関との連携を図る。

- ⑤ 定期的な避難訓練や登下校の安全指導等を通し、生徒の安全意識と危機管理能力の向上を図る。
- ⑥ 薬物乱用防止教室、非行防止教室等を開催し、飲酒・喫煙・薬物に関する指導を徹底する。
- ⑦ 部活動のガイドラインを遵守し、適切な運用を進める。

(3)最終評価（成果と課題）

スポーツテストの結果は、一つの指標として意味はあるが、これが学校での「体育」の授業の成果を反映するものとは考えられない。中学校入学までの生育の中の課題が現れているものと考える。地域の中で「体を使った遊び」が十分出来る環境を整える必要がある。

さらに幼少期から、ボール遊び・走る・跳ぶなど、少々のけがは恐れずに行う経験が、家庭の中でも必要と考える。その面では、中学校から地域や小さな子どもを育てている家庭へ訴えることは、なかなか難しい。幼稚園・保育園とも連携している小学校との協力関係が大切といえる。

(4)分析を踏まえた取組の改善

次年度も、体育の授業内で行うスポーツテストには、真剣に最後まであきらめずに取り組むようにさせたい。また、どの種目を扱う場合でも、基本的な体の動きや柔軟性を大切にした準備を怠らないようにしたい。また運動嫌いをつくりたくない工夫もしたい。

(5)学校運営協議会による意見・支援策

（新型コロナウィルス感染症拡大防止のため開催できず）